

産 婆

—その巫女的性格について—

鎌 田 久 子

一、まえがき

人はこの世に生をうけ、生長してゆく段階において、有形無形、限らない援助を周囲の者から享けてゆく。その第一はまず生れる時の援助者、即ち産婆、今いう助産婦である。今日では助産婦規則により、一定年限の学業を修得し、国家試験に合格した者のみ、この職業にたずさわることが出来るが、前代の村落生活においては、トリアゲバアサン・コズエババなどと呼ぶ、村の巧者な年寄に依頼することが多かった。古事類苑に引用するところの、江戸時代末の著「明良帯録」には、和州婆々、薩摩婆々等の名称があり、「御中藤格にて五人扶持」と、祿高が明記してあり、職業とは明確には指摘出来ないが、やや職業化された産婆が見えている。西鶴の小説の中にも、トリアゲババ・トリアゲカカなどとよぶ職業的助産婦がある。

「時慶卿記」廿二、慶長九年十二月二十二日の条に、「子生産しの尼に、一俵餅一重、ハム三本遣候祝儀如例」あるいは、同書廿八慶長十四年五月三日にも「子産せの尼へ、兩種樽、八木一石遣候」とコウマセノアマという名称があり、祝儀に米や魚をおくっている。慶長十四年の子産せの尼は、西の塔院の公卿であり、身分のいやしいものではない。尚この尼という呼称は、僧籍の尼ではなく、四十才すぎた老婦人、老婆という意味である。

産婆という言葉、あるいはこれに概当する言葉として、更に年代をさかのぼると、永享六年二月九日、足利義教の子、義勝が誕生した時の日記、「御産所日記」に見えている。

普広院殿様御時之事

若君御誕生、永享六年寅甲二月九日寅刻、天晴風静也。

御産所波多野因幡入道元尚宿所。鷹司西洞院

一、同九日 詞利帝母、同御太刀一腰、伊勢殿御持参也。

一、十一日 午尅御湯始。
一、御腰懷、上臈

御女房達三人

御乳人

御腰懷

とあり、「御腰懷」は明らかに助産である。新潟県西蒲原郡
国上村では、産気づくと親しい女が、産婦を抱いてやると、
安産するといひ、これをコシダキとよんでいる。佐渡の河原
田でも、コシバアサンという者がおり、土地の巧者な人を頼
むということである。これらはいづれも他地方の産婆に概当
するものであり、御産所日記の「御腰懷」に当るものであ
る。

田中克己教授の御教示によると、中国においても、明朝末
の「金瓶梅」に「抱腰」という語が見え、此産婆之助手也、
抱産婦之腰との註があり、抱腰が産婆即ち産婆の助手である
ことがよく分る。産婆は元朝の「輟耕録」に「郷曰生婆、正
曰穩婆」とあり、文献ではこの語が一番多く使われているそ
うである。その他収生婆、収生姫、産婆、穩媪、接生婦、
老娘（この語は乳母の事をも示し、産婆と乳母が同語である
ことは興味がある）等の語が使われているようである。

江戸時代の「安斎隨筆」には、「穩婆」の語をそのまま採
録して、

「穩婆 トリアゲババ也、国史、三鏡類、世継類等古代の実
録にトリアゲババの事なし、産になれたる常の老女、此事を

せしなるべし」

とあり、通例、産婆をトリアゲババとよんでいたことが分
る。安斎隨筆の「産になれたる常の老女」に、助産を頼むと
いう習俗は、今日でも、村の器用な老婆や、群馬県境町のよ
うに、職業的な産婆はおらず、本家か新宅など、親しい家の
手馴れた老婦人に頼み、次子からは一人で始末するという例
など、村落生活においては、ごく当り前のことであつた。

第二次世界大戦を境にして、我国の民俗慣行は大きく変化
したが、特に産育習俗は衛生知識の普及によって古い習俗が
一変した。母子手帳、保健婦の活躍などにより、一般婦人の
医学的知識が目覚め、今日では一人で出産を始末するという
ことは、よほどの僻地に行かぬ限り珍らしいことになつた。

福島県石城郡草野村のように、産婆をトリアゲババサマとい
うが、トリアゲババサマは村の器用な老婆であつたが、今で
は若い産科婦になつたという所が多い。しかし一方、六十
才、七十才の老婆の中には、まだ一人で臍の緒を始末したと
か、産湯をわかつておいてから出産したという話も珍らしく
ない。長野県と新潟県の境に近い飯山市富倉で聞いた話に、
この山村では保健婦が巡回するまでは、即ち、二十年前まで
は、お産は坐産が普通であり、五十才になる話者は分家故姑
がおらず、末っ子まで全部自分でとり上げたということであ
る。この事実から考えて、出産は本来一人で始末出来得るも
のであることは明らかである。更に現在助産婦が、医師法に
属しておらぬ点から考えても、出産は事實は生死にかかわる

ことでありながら、病気とは見なされてはいないのである。安齋隨筆にある如く、古代の実録にトリアゲババの事なしというのも、今日の助産婦に当る産婆、職業的産婆が古くから存在しないことをあらわすものである。しかし職業的産婆が古くないといつても、一方において村落の素人の老婆の手をかりる、所謂トリアゲバアサマの風習が、新しいものとは思われない。

山形県西置賜郡小国では、産婆は近年のものであつて、昭和の始め頃までは、難産でもなければ産婆に診てもらうものではなかった。奥地では、現在でもトリアゲババだけですす所がある。産婆を頼んだ家でも、別にトリアゲババに依頼しておく。各部落には特に分婉に巧者な年寄がいて、何時でもトリアゲババに頼まれるという。即ち、この村には産婆とトリアゲババの両者がいて、産婆は明らかに、医学的な知識をもつ職業的助産婦をさしている。素人のトリアゲババから職業的な助産婦に移行してゆく過程を示す一例であるが、同時にここには多くの問題を含んでいる。産婆以前、トリアゲババとよばれた老婆の役が、そのまま今の職業的助産婦に移りかわりつつある現象なのか、あるいはトリアゲババと産婆は、その性格を異にしている故に、両者に依頼するものなのか、考えてみたい問題である。まずトリアゲババは、単なる技術者としての助産婦であつたものか、名称その他の面からみてゆきたいと思う。

二、名 称

柳田国男先生は、雑誌「民族」三巻一号に、「産婆を意味する方言」という一文を発表しておられる。名称から産婆の機能を考察されたものである。今それを参照しながらその後の資料を加え、分類してみたい。

(一) トリアゲバアサン

トラゲバアサン・トリアゲバサともいい、全国的に弘く分布し、多く使われている名称。東北地方の南部から関東地方、中部地方、中国地方の報告が多いが、全国共通語といつてよいほどである。トリアゲルというのは、前生からこの世に子供の生命をひき上げる、この世の仲間ひき入れる意であり、これと同義語に、ヒキアゲババ、コトリオヤなどという呼び方がある。

ヒキアゲババは、中国地方から四国にかけて多く使用されている言葉である。島根県石見町では、産の時引上婆が来、子供が生れると三日目にこの婆は必ず子供を背負つて寺へ参り籠経してもらう。子に代つて改悔文を一句一句唱え、お齋米を一升持つて行つてトキをよばれ(食べる)て帰る。引上婆は名付け(七日目)の時必ず招待される。この地方では、正月は餅、盆にはそうめんを子供の背につけて、引上婆さんのところへ挨拶にやるのが普通である。

同県邇摩郡馬路町でも、大正七、八年頃までは部落にヒキアゲ婆さんが一人いて、産気づくと、このヒキアゲ婆さんと

もう一人コシダキバアサンを頼んだという。コシダキバアサンの方が、技術的産婆だったのかもしれない。

岡山県久米郡、山口県大島郡、高知県の中村市附近でも、産婆をヒキアゲバアとよんでいる。

コトリオヤという名称も各地にある。鹿児島県黒島では、産の世話をしてくれた女性をコトリオヤといい、村には素人で巧者な者がいて、そのオヤに頼まれる。以前は盆暮のつけ届けをしたものであるが、今ははっきりしない。福島、茨城、群馬の諸県でも、コトリババという所があるが、トリアゲババあるいは産婆の名称にかわりつつある。

コトリは、聾とり、嫁とりなどのとりと同じく、子供をあらかじめこちらへ迎え加える意で、換言すれば子供をこの世の中に引き入れることである。

(二) コズエババ

コゾエドン・コゾエババなど、多少の変化はあるが、九州一般に広く使用されている。長崎県平戸ではコゼンバ、同五島の三井楽ではコウゾエバンバ、博多ではコズリババ、福岡県三鶯郡ではコーディーババ、久留米地方ではコザエババ、宮崎県では、コゾエバアサン、コゾエドン、コゾエバ、コズエ等の名称がある。

コズエは子スエ、即ち子供を手にとりすえる、把持することとで、我が仲間に加えることであった。トリアゲよりは、やや意識的な生存の承認ではなからうかと思われる。

(三) ポコウマセ

(一)、(二)の名称は、共に子供を現世の人間仲間に加える人の意であるが、ポコウマセは、具体的にその役をあらわす呼称である。長野県諏訪地方で、今は職業的産婆がいるが、もとは素人の老女を頼み、これをポコウマセババアとよんでいた。岡山県でもただウマセという所がある。同県小田郡新山村では、コウニンバアバア(子生み婆)という名称があるが、これは後産がおくれるような時頼む人で、普通は家の者が世話をする。即ちウマセ、コウミなどの名称には、技術的な要素、今いう助産婦的性格が含まれている。

(四) コナサセバサマ

青森県八戸市、秋田県平鹿郡ではかくよんでいる。子をなせる、生ませる婆さまの意で、(三)のポコウマセと同義語である。しかしコナスという語には、単に子供を生ませるという意味だけでなく、子供を成長させる意味を含んでいるのではないかと思う。

(五) アライババ

仕事の上からの名称であるが、鳥根県簸川郡北浜村、山口県阿武郡嘉年村でこうよんでいる。生児を洗うその動作からであろうが、山梨県にアラチバアサンという言葉があり、「産育習俗語彙」によれば、これは荒血の忌を清める人の意ではないかとあり、あるいはアライババも産の忌を清める人の意があったのかもしれない。

(六) テンヤク

医者 of 古称、典薬からきたもので伊豆大島でかくいう。青

森県弘前地方ではテンガクババ、テンニヤゲババというの
その訛りである。津軽では、昔ボサマが産科医をやったとい
われている。言葉は全く違ふが、同じ内容のものに、鹿児島
県枕崎地方で、産婆のことをヤボイサドンというのがある。

この地方で普通の医者もヤボイジャサンとよんでいるのをみ
ると、藪医者を普通の医者と考えたのであろう。今日では藪
医者といへば、下手な医者のことだが、本来は今日の医者以
前の、呪術を兼ねた医者、即ち野巫のことであった。産婆を
ヤブというのも、これからきているのである。

(七) ヘソババ

臍の緒を切るところから、四国、九州、南西諸島にかけて
広くこう呼ばれている。福岡県の大島では、ヘソババは鮑の
男貝と女貝でヘソの緒を切ったという。高知県幡多郡沖の
島、大分県速見郡でもヘソバアサンとよんでいる。鹿児島県
喜界島では産婆役は母親の仕事で、フスマンマー(臍母)とい
い、出産の折臍を接ぐ役である。トカラ列島の小宝島では、
ネイシという巫女がヘソババの役を兼ねている。同じトカラ
の悪石島でもヘソババというが、ここでは産婆だけでなく、
医者兼ねたようなものである。ヘソババは、子供の病気だ
けでなく、大人も病気になるともみてもらっている。ヘソババ
の知識と、ネイシという巫女の呪力によってなると信じて
いる。

臍の緒を切る役の名称として、福島県にエナツケというの
がある。胞衣つけ、つけは接ぎ、即ち切るの反対の忌言葉

で、これは臍の緒を切る者である。三重県南牟婁郡有井村
や、淡路島で、マキババとか、オマキというの、芋巻き、
麻を臍の緒にまいて、自然にとれるようにする者の意ではな
いかと思う。これもヘソババと内容は同じものである。

(八) コシダキ

前記「御産所日記」にある「御腰懐」と同じものに、ウシ
ロババとかハラモンババというのがある。福岡、熊本両県で
こうよぶ所がある。コシダキについては前述した新潟県、島
根県などの報告がある。愛知県では、産婦の腰は母親か、親
しい婦人が抱いてやり、トリアゲババサはただ側に坐って
るだけという所もあるが、この抱いてやる人の名称は報告に
ない。

(九) イセウバ

「蟄居紀談」に産婆のことを伊勢姫とあるが、これは江戸
期の和州婆々、薩摩婆々などと同じく、ある特定地域の居住
地名である。京の桂女が、明治初年まで、その先祖が、懐
胎した神功皇后に仕えたという伝承をもって、將軍家や富豪
有力な家に入りして、平産を祝し、又縁児の強健をまじな
うのを職分の一つにして渡世してきたことは、名取襲之助編
「桂女資料」^(註10)にくわしい。桂女は巫媚とも、産婆とも、婚礼
の介添人ともつかぬ者である。桂という土地に住む者の称で
あるが、伊勢姫もあるいはこの桂女などと同じく、伊勢とい
う神宮の信仰を中心にした特定地域に住むものの称だったか
もしれない。

三、生児との関係

生児と産婆の関係は、トリアゲババ、ヒキアゲババ、ボコウマセなどの名称から、出産の時から開始すると考えやすいが、胎児の時、すでに祝事をして両者の関係をきめる所が多い。

五ヶ月、又は七ヶ月の帯祝に、トリアゲババを正座にして祝宴をひらき、帯をしめてもらうというものである。山口県周防大島では、長子に限り、五ヶ月目の帯祝に、職業的な産婆にみてもらう一方、トリアゲババをきめる。本来ならば何れか一人でよいものを、二人に依頼するというのは、前にものべたが、曾てトリアゲババに助産してもらった故に、職業的産婆になってもトリアゲババを依頼するものか、あるいはトリアゲババには職業的産婆にはないもの、即ちある呪力を持つと思っていたものか、考えてみたい問題である。

生児の臍の緒を切り、産湯を浴びせ、産着をきせ、初外出するまで、あるいは名付けまでの関係という報告が多いが、そこには単に技術的産婆、即ち今の職業的助産婦を迎えるという意識だけでなく、トリアゲババアサンには、その名称の如く、生児の靈魂、あるいは産の忌との関連など、職業的助産婦とは異なるいくつかの要素がある。以下各地の習俗を比較しながら、生児との関係にあらわれた産婆の性格を考えてみたい。

滋賀県高島郡西庄村では、出産時になり産婆がくると、ま

ず有り合せのもので御飯を出す。産婆は腹の減る仕事故といっている。産れると家人は御飯を炊き、産婆の酒肴を買いにゆく。この時は必ず尾頭付のものを用意する。産婆が帰る時は、其魚と重箱に御飯をいっぱいつめて持たして帰す。翌日、産婆が見舞に来、この日も重箱に御飯をいっぱいもたして帰す。三日目は、三日のオリ湯と云って、産婦に腰湯をつかわすが、この日も産婆には尾頭付の肴を出し、重箱をもたして帰す。六日目には、六日ダレと云って産婆が来る。この日も尾頭付をつけ重箱に御飯をもたして帰す。

産婆にまず食事を出すということは、勿論力仕事ということもあろうが、産の忌に入る、産家の食事をとることによって、それまで普通の状態にあった産婆を、共食ということを通して同じ忌にふくする者にするということもあつたのでなからうか。魚をつけて重箱に御飯をつめて帰すことも、仏事の忌ではないが、産婆にも産の忌がかかり、産婆の家族との接触をさせたのではないかと思う。母あるいは姑が助産をした場合は、共に同じ家であり忌もかかるわけである。外からの人を依頼する場合にも、当然この忌はその人にもかかるのではないかと思われる。例えば、岩手県東磐井郡松川村では、コナサセ婆・サマ(産婆)は一週間か、十日間ぐらい起居を共にして世話をするそうである。あるいは、高知市附近では、昔は産婆を雇う時は、大抵三日目までは生児の家に宿泊せしめ、三日の日明(忌明け)に生児を洗って帰るを例とした。鳥取県赤碓町でも、トリアゲババアサンは産後三日間は産

家において、産婦の世話をする。御礼には嫁の着物を一枚やるということである。これら諸例のように産婆が生児の家に寝泊りするというのも、出産にたずさわることによって忌をかわり、外出出来なかったことをあらわしているのではないかと思う。滋賀県の例も、産婆が外から通うようになって、尚食事だけは産家のものをたべていたのではあるまいか。

産婆に食事をしてもらう例は多いが、一つは産婦との共食、一つは産神との共食、あるいは両者が判然とせぬ地方もあるが、いずれにしても共食者としての産婆がある。

広島市附近では、子供が生れるとすぐウブノゴハンをたいで、膾を簡単に作って祝う。トリアゲバアサンに御酒をついで、必ず山盛りについた御飯をたべてもらう。ババサンは自分がたべる前に赤子にたべ初めの真似をして後に自分がたべる。ここでは七日目まで毎日産湯をつかわせに來、七日目に産婆に御礼する。

福岡県八女郡福岡町でも、生児に初湯をつかわし終ると、その釜で御飯をたき、産婆及近所の主婦を招き、御馳走して振舞う。尾頭つきで、必ず膾をつける。七夜の祝も同じような御馳走で、この日産婆に御礼をする。

埼玉県川越市でも、子供が生れるとすぐ御飯をたき、産の神に供える。これをオブタメシというが、これは産婆がたべることになっている。

愛知県の三河地方では、産神様の御膳というのがある。三日目の湯初の日膾などを作って親類の者などに饗するが、そ

の時、同じ御馳走の膳を一つ作り、これを産神様の御膳といひ、最後はこの膳を産婆の家へ贈るといふ。此膳には小さな小石二つをのせ、これは生児の守りとなる。

出産に居合せた者、あるいは近所の女の人達に、ウブメシを共食してもらうことは、共食することによって生児、あるいは産婦に精神的援助を与えることになる。

茨城県浮島地方、富山県高岡市では、分娩直後産婆に白米一升、あるいはこれに饅頭二本をつけて贈る風習があるが、これはあるいは産婆が産家の火をさげようとする意識を生じてからのものではあるまいか。高岡市ではこれをイナゴメといひ、胞衣を始末してくれる礼だといふが、これが分娩直後におくるという点から、さきの出産直後のオブタメシと考え合せると、産婆が産家の忌から次第に身をさげようとする段階において生じた風習ではなからうか。

さて生児の取扱ひ方についても、出産直後は何もせず、三日目になってからウブユを使わしたり、三日目にはじめて着物をさせるなど、さまざまの変化がある。一応、三日を中心とした産婆と生児、七日頃に重点をおく風習、あるいは二十日前後の宮まいりを中心としたもの、更には三日、七日、モモカ（食い初めの日）と何回も何回もくり返して行われる生児との交渉を、時間を追って整理してみたい。

三日を中心とするもの

青森県八戸市では、コナサセバサマは三日目に産婦に湯をつかわせるので、この日バサマに御馳走を出す。岩手県稗石

地方でも、出産三日目にコナサセを呼び迎えて、産婦に湯をつかわせ、生児も洗い、コナサセに祝儀を出す。小宴をする。長野県飯田市附近でも、三日目に湯をつかわせるが、この日小豆飯を炊き、尾頭付きの魚、神酒などを産神様に供え、産婆に出す。群馬県利根郡赤城根村では、三日目をサンヤメといい、トリアゲバアサンが子を抱いて、三軒の家の便所まわりをする。子供の額には犬という字を書き、橋を渡らぬようにして三軒まわる。同県多野郡でもやはり三日目にトリアゲバアサンが抱いて便所まわりをしている。広島県佐木島では、出産は納屋でして嫁の母が面倒をみる。ヒキアゲバアサンはお産の時、三日目、七日目、ホンケに帰る日（女なら二十一日、男なら三十三日）だけ生児に湯を使わせる。三日目をミツカイワイといい、母家で小豆飯を炊いてそれに魚を添え、ウブガミ様に供えヒキアゲバアサンを招いてお祝をする。ヒキアゲバアサンは三日目に、アトザンをもつて海岸にゆき、その日の方角をみてアキの方の砂を深く掘って埋めて来る。

三日目の行事には産婆が関与するところが多い。産婦の忌と、生児の忌には、血の忌と産の忌との軽重がある。産婦は両者に服するが、生児には産の忌のみであり、初外出も産婦より早い。しかし忌は一時にはれるものではない。日数を経るにつれて、徐々に常人となつてゆくものである。生児も、一つ一つの儀礼を経るにつれて、肉体的にも、精神的にも人間としての形を作つてゆくと考えられたのであろう。その儀

礼の共食者、あるいは行動を共にする者、更に進んでその儀礼を行う産婆が考えられる。これは三日目の儀礼より、生児が人間として更に強く意識されてくる七日目の行事により多くあらわれている。

七日目を中心としたもの

青森県三戸郡館村では、五日目又は七日目に、産婆が赤子の膳を拜んで仮に名前をつける。こうしないと、子供が大きくなってヒビキラシになるといふ。前記した八戸市でも七日目をマクラサゲといつて、産婆と親戚の子供を招いて御馳走する。産婆は膳に向つて、まず赤子を養う真似をするといふ。磐石でも、七日に産婆を正座に坐らせて孫祝をするが、この日名付け祝も一緒にした。七日目をお七夜といい、初外出する地方は多い。伊豆の式根島では、この日トリアゲ婆サシが抱いて、荒神様、氏神、井戸神、便所の神の順々にゆく。群馬県は、最近各地の民俗が調査され、産育習俗もくわしい報告がある。板倉町ではお七夜の主役はトリアゲバアサンで、名付をする。このあとセンチンメーリをする。便所、井戸神、ヤシキチンジュ（稲荷）、カマツクドにまいる。勢多郡横野村は、七日目に産婆が抱いて三軒の家の便所をまわる。神奈川県津久井郡、新潟県六日町地方、栃木県芳賀郡茂木町、同じく益子町でもお七夜にトリアゲバアサンに抱かれてオガマサマ、井戸神様、便所まいり、橋まいりをするが、益子町では便所で子供に人糞をたべさせる真似をする。人糞の呪力によつて、子供のすこやかな成長を願つたものである

うか。福島県石城郡地方でも、七日目に産婆が子供を抱いて屋敷神におまいりにゆく、これを氏神マイリとよんでいる。茨城県久慈郡大子町では、七日目をヒトシチャあるいはオヤイワイといって、産婆をよんで、餅や赤飯をたいて祝うという。産婆は子供を抱いて神棚、オカマサマ、井戸、便所などをまわる。このオヤは産婦でなく、産婆をさしていることは、生児にとり、産婆も又一種のオヤであったことをあらわしている。青森県野辺地方では、七日の祝は産婆、即ちコナサセバサマが正座で、生児をイジコ（子供を入れて守りをする道具）に入れ、料理や飯をたべさせる真似ごとをする。

この日の客は子供達である。遠くトカラ列島の中の島でも六日目に名付けをするが、その時嬰兒を「イサ」という一種の揺籃（籠ではなく、木の箱にひもをつけ、天井からぶらさげる）の中にねかせる。枕には米を一升三合入れた袋を用いている。ヘソババはイサを動かしながら、嬰兒の名をよび、そこで初めて名がつけられるが、その時、ヘソババはイサの下に頭を入れ、コッココーと三度鶏の鳴き真似をする。トカラ全島でイサに入れて命名するが、小宝島では、これをネイシ（巫女）という村まつりに参加する巫女がしている。呪法を行うものに、喜界島の床離れの儀式がある。この島では、五日目に、フスアンマ（臍母）は子供を抱いて、表座敷のフンバヤ（本柱）を踏ませ、

柱ぬ丈成りよう

と唱える。柱の丈のように、大きくなりなさいという呪だそ

うである。同島小野津部落では、やや形式がかわり、フスアンマは袋に米一升を入れて頭にのせ、手に包丁をもち、やはり子供に本柱をふませて、

足つ強さし、足強く

と唱えるという。

お七夜、名付け、あるいは初外出など、七日までの行事は産婆が主となつて行う所が多い。生児にとつても、又産婦にとつても七日は一つの区切りであったのであろう。京都の東大浦では、七日をオマアガリといって、トラゲバアサンが、自分の家で炊いた御飯をもつてきて産婦にたべさせる。あるいは同県筒川のように、七日目にトラゲバアサンに湯をもらい、ヨビアゲテモラウといって、小豆飯で招いてもらつてから家の人と一緒に食事をする所もある。産婦は産婆の力によつて、忌の世界からぬけ出し、平常の生活に戻ることが出来るというのである。これからみれば、トラゲバアサンには産の忌はかからぬものなのか。静岡県の天竜川沿いでは、産婦の忌明けの時、近所の子供と一緒に食事をとることによつて忌の生活から平生の生活に戻る所がある。

二十日前後の宮まいり

七日目のお七夜で産婆は来なくなる所もあるが、重ねて二十日頃に宮まいりにつれてゆく地方もある。

山口県熊毛郡勝間村では、初外出は産婆につれていつてもらうが、これをシメアガリ、あるいは橋渡りといい、更に三十三日目の宮まいりにも産婆につれて行つてもらう。前述の

広島県佐木島では、女三十三日、男三十五日をイミアケといつて、満潮時に宮まいりをする。ヒキアゲバアサンが抱き、女親を伴つて八幡サンにまいる。宮詣りの帰途、村中の親類知己をまわつて、「広うなりました」と挨拶する。親戚などでは、祝儀をくれるが、この祝儀は「儲けはじめ」といつて、子供とヒキアゲバアサンとで半分に分ける。鳥取県赤碕町、長野県飯田市、新潟県中魚沼郡などでも宮まいりの日は多少ちがうが、この前後に産婆がつれてゆく。同県西蒲原郡国上村では、女兒は二十一日、男児なら二十日目に、産婆を主賓として、親族や村中の女主人を招待し、出生の披露の宴をする。これをバサブルマイというが、バサは産婆のことである。

モモカ(百日)と誕生を中心としたもの

奈良県に「百日のアライ子」という言葉がある。産婆が産湯をつかさせた子供に対する愛情をあらわしたものであるが、産婆と生児との関係はモモカ、所謂食ひ初めの日にもみられる。山形県西置賜郡小国村では、女兒は百日目、男児は百日目目にクイソメ祝をする。この日はトリアゲババと里方の母親をよんで、小豆飯をつくる。産婆は呼ばぬ。生児にも一人前の膳を作り、飯粒一つを一杯だといつてたべさせる。クイソメ祝には前記の二人以外、近親者も招かない。鳥根県能義郡広瀬町でも百日の食ひ初めに産婆をよぶ。神奈川県足柄上郡山北では、近所の年寄りをトリアゲバアサンに頼むが、百日目のクイソメと、ムカワリドキという誕生日にはト

リアゲバアサンを招いた。新潟県中魚沼郡でも女百日目、男百二十日のクイソメに産婆を招いて御馳走する。誕生の時も、産婆が子供を箕の中に立たせ、餅で打つ真似をする。さきにあげた小国村でも初誕生をムカエツキというが、この日の祝にもクイソメと同じく、里方の親とトリアゲババのみ招いている。鳥根県の赤之江でも、初誕生のソナエ餅をふませる役は産婆であった。

産婆が主役になる行事はまだある。例えば三重県鈴鹿郡では、カミタレという名付の式を行い、この日の主客は産婆であった。カミタレは神立と髪垂の二説があり、前者はこの日出産に立ち合われた産神がお立ちになるといい、後者は子供の生育を示す儀礼という。いずれにしてもこの日産婆を正座にすえて祝うことは、産婆は産の神をまつる者であり、この日まで生児の生命を保護する者という概念があったのではないかと思う。三日、七日あるいはモモカなど、生児の生存権が一步一步確認され、一個の人間として形成されてゆく過程において、産婆は常に重要な役割をしめている。

千葉県山武郡武勝村では、産婆とは別にトリアゲオヤがいて、これは、親の仲人が当るものであった。子供は七才までこのトリアゲオヤの管轄にあり、七才になるとはじめて両親の子供になるという。したがって仲人の責任は重大で、簡単に結婚の結びつきをするではなかった。ここではトリアゲオヤは七才まで子供と関係するが、茨城県福島地方も、七才のヒモトキの祝いまで、トリアゲバアサンが関係することが

多かつた。つまり子供が精神的に子供である時代（七才で氏子入りが多い点から考へて）はこのトリアゲバアサンが関与してることになる。

四、呪力をもつ人

産婆の名称、あるいは生児との関係をみると、各地で産婆といわれている者には、二通りの産婆がある。その一つは単に技術を要する、いわゆる職業的助産婦である。無事出産すればそれで縁の切れてしまう者である。他の一つは、何らかの形で生児との関係を有するものである。前代のトリアゲババには、この形式をとる者が多い。後者は更に二つに分けられ、その一は実際に助産し、生児との連帯感を有してゆく者。その二は直接手をくぐらずにしてもある限られた仕事だけとか、あるいは出産には立ち合うが、助産はしない者である。例えば山形県小国村のように、サンバがいてもトリアゲババを頼み、その役目として臍の緒を麻糸で結び、葦のへらで切る真似をしてから缺で切る。サンバは生れてしまえば、それで縁が切れるが、トリアゲババはヒトオボヤ（七日目）二十一日目のヒアキの時、モモカの祝、ムカエツキ等、生児の諸祝には必ず招かれる。更にトリアゲババと生児とは一生のつながりがあつて、生後三年間は、生児の家ではオソナエモチを持って年始にゆく。トリアゲババが死ぬと、取上げて貰つた者は湯灌の折洗つて返さねばならぬといひ、野べ送りもつとめることになっている。小国の例では明らかに技術的

な助産婦、即ち職業的産婆と、さにあらざる者が存在している。この点から考えると、前記のマキババ、オマキなどの名称の産婆も、あるいは生児の臍の緒を、芋で結ぶだけの役目の者であつたかもしれない。

愛知県伊藤正之助氏の報告によると、彼地ではトリアゲババサは産婦のそばに、ただ坐っているだけであつたとか、このトリアゲババサは、五ヶ月あるいは七ヶ月のオビカケの日に、ハラオビをしめてくれる人であるが、実際の助産はしていないのである。

更に前にあげた島根県馬路のように、コシダキ婆サンとヒキアゲバアサンを頼んだという例なども、実際の助産と、さにあらざる者の両者だつたかもしれない。

とすれば、出産に立ち合いながら手を下さないトリアゲババは、何の為にこの場に臨むのであろうかという素朴な疑問が生じてくる。もう一度はじめに戻り、出産が本来一人で始末出来たものであることを思うかべれば、このトリアゲババは、何らかの形において生児との関係、直接的関係をはなれた、呪力をもつ関係において、この場にのぞんだのではなからうか。即ち産神の司祭者あるいは産神の憑代となる巫女的性格をもつ者といつてよいかもしれない。岩手県の磐石地方では、コナサセも以前の者は様に口中で呪文を唱えていたといひ、伊豆新島のハカセバア、ハカシンバも、今は産婆のようにいわれているが、もとは難産に祈禱したり、子供

家を訪れる。子供には湯浴みをさせるくらいで、産婦には関係ない。名付の日には正客として招かれる。ハカシバアは其席で、何か唱え言をして祈禱する。生児のハツドシには白紙を三角に折って中に米を入れ、笹を添えたものを作って生児におくる。生児の家ではそれを神棚に飾るが、これをハカセサマとよんでいる。毎年作りかえるが、子供が七才になるまではハカセサマの守護にあるという。ハカセバアの家には十二ハカセと呼ぶハカセサマの神棚を祀っている。出産にはこの神が来なければ安産し難いとも伝えている。十一月十四日をハカシマチといい、ハカセバアの家で、老女仲間を集めてこもり、神祭を行っている。これは明らかに子供の神をまつる巫女である。

産婆に呪力をみとめていたことは、茨城県の筑波山麓、福島県大沼郡で、エナギ（生児がはじめてきる着物）を取上婆さんが作ってさせる習俗によっても分る。茨城県では、赤い衿のついた袖なしに、五つ針、三つ針で赤糸の背縫がついたものである。福島県でも、白木綿の袖なしで、黒衿をつけ、衿側を三角に切って折返し、男子なら左に一針大きく縫って小さく一針、次は大きく二針というように縫う。女児なら右に大きく一針ぬって次に小さく二針ぬう。下はくけないでおく。子供には一番最初にこのエナギをさせるが、これを着せぬと丈夫にならぬという。あるいは又、高知県の沖の島のように、宮まいるの時へソババの所へ子供をつれて行く例や、徳島県海部郡のハツアルキのように、生児の初出をトリアゲ

バアサの家に行く例など、他地方の初出がカマドの神、水神サマ、便所の神、あるいは橋まいりであることを考え合わせると、このへソババやトリアゲバアサマは、生児の靈魂、生児の生命を守護してくれるものとみなしていたのではないかと思う。

更に具体的な例として、沖縄八重山の石垣市では、生後、庚の吉日の日、チイナーマチキといって、生児と母は産婆の家に行き、その香炉の前に行って御礼をいう。プスチイギインミ（臍を切る姥、即ち産婆）は真琴で細かくよつた麻糸を七つ結び、これを母と子の首にかけてやる。これをカニヂナーマハクといつて、赤子の魔除になり、無病息災で育つといわれている。奄美群島の、沖永良部島では、産婆をフスアジ（臍婆）又はクワナサシアジ（子を生さしめる婆さんの意）とよんでいる。この島では臍の緒を処理することを「臍をつぐ」とも「クレをくれる」ともいっている。このクレは「位」即ち宿命、運命を意味し、人間の一生間に現れる貴賤、貧富等の諸事象は、すべてこのクレ即ち宿命に基づくものであり、それは出生直後臍をつぐ時、産婆から与えられるものであった。小宝島の名付けは、へソババ即ちネイシがするといふのも、子供の運命をへソババが掌握していることに他ならない。

さて以上の諸例をみると、そこには明らかに技術的な産婆ではなくして、呪力をもつ人、巫女的性格をもつ産婆をみる事が出来る。

五、賤業化

産婆を隣近所の老母、あるいは身内の手馴れた者に頼む以外に、やや身分の賤しい者に頼む風習が各地にある。

熊本県阿蘇地方の報告に、「今でこそ学問のある立派な産婆さんがいるけれども、昔はそうでなかった。どこから流れてきたか知れぬような婆さんが、取上げの役をつとめていた。大抵の村でも一人位はいて、相当地に重宝な者ではあったけれども、どちらかといえば賤業のようにさえかんじられるものがないではなかった」とあり、他所者、漂泊者に産婆の役を頼んでいる。静岡県田方郡では、産の穢れを忌んで、以前は非人の妻をやとって取上げにあたらせたという。ある特殊な階級の者にこの役をあたらせる例は、能登の鹿島郡にもある。ここでは、産婆のことをバアサ、またはババとよび、村はづれに任んでいる藤内という特殊部落の老婆を頼むという。ババ迎えに行く時は、必ず二人で行くことになっていた。いかに顔馴染の者でも、この時は一人で使いに出てはならなかった。バアサは使と使の間に入って産家に来るが、途中は無言である。夜中に送る時も同様であるが、後か先になると魔につかれるという。藤内は身分の卑しいものとされているので、葬儀の時は土間で食事をさせられるが、出産後、七夜振舞には、座敷にあげられ、祝の席に招かれた女客の全てから祝儀の包みが与えられる。富山県水見郡には、トーナイ医者・ヤブ医者という言葉もあり、彼等は昔医者もやって

いたという。

葬式の告げ人が、必ず二人で行く、所謂二人使いは、忌に對する對抗というか、行き先にいかよの忌があつても、それに負けない為ではないかと思うが、このババ迎えの二人使いも、又それと同じように考えられたのではないかと思う。

ある特殊な階級の者が、この任に當るといふことは、喜田貞吉「散所法師考」柳田国男「山莊太夫考」^{註5}にくわしい。それによると、彼等^{註4}はもと産小屋の地に住み、産婦の世話をすることを生業としていたらしい。後に産小屋の風がやんで、生計が出来なくなり、他の職業となつたり、遊芸人となつて、遂に今日のように殆ど消えてしまつてゐる。例えば丹後の算所という地名も、もとは産所ではなかつたか、と論じてゐる。しかし何故に、このような特殊な階級の者が産にあつたのであろうか。出産が一軒の家の出来事ではなく、一つの部落、一つの村全体の出来事、関心事であつたことは、今でも出産があれば、炭焼仲間全部一日休むとか、漁をひかえるといふことでよく分る。千葉県九十九里浜北端の三川浜部落では、昔は出産があると部落全部出漁しなかつたが、今ではその家の者が関係してゐる船だけといひ、それでも漁に困るので、出産が近づくと家族の者は他出して、産の忌がかからぬようにするといふことであつた。社会生活、経済生活が広範囲に及ぶにつれて、忌をさけようとする手段をこうずる風がうかがえる。産の忌をさけようとする意識は、産にた

ずさわる者を限定してきた。賤業の者に依頼するのも、一つには彼等が常人と異なる階層にあると考え、したがって常人の穢れを彼等は忌まぬとする思想によるものであろう。例えば岡山県備中町でも、難産の時はフカバラ(地名)のユリという茶センがもんでくれたというが、茶センは特殊部落であり、偶然かもしれないがユリという名は巫女に多い名前である。周防大島のヒキアゲンバアも誰でも出来るものではなく、昔からの家筋であったという。料金はとらず、その家に何かタバゴト(晴の食事)がある日は必ず来て正座につき、御馳走になる。今ではあまり地位のよいものとしては待遇されていないという。岡山県久米郡坪井村のヒキアゲバアサンは、出産にたずさわる以外に葬式の時に雇われて泣きに行くという、泣女を兼ねていたのである。泣女は能登では海女がしているが、多くの地では特殊視されている者がしている。

産婆を賤業化させたことの一つは、忌に対する考え方の相違、即ち産神をいかようの神とみるかによるものではないかと思う。産神が、鎮守の神と区別視されれば、その神に奉仕する者が必要となり、更に産神が産穢をいとわぬ神となれば、奉仕する者も又、穢をかまわぬ者となってくる。小宝島では、産があれば全島漁を休んでいる。それは部落祭祀をあずかるネイシがヘソババとなって直接出産の場に立ち合い、産神と部落神の区別がないのである。この島においては、産

婆は賤業ではなく、神聖視されているものである。同じ十島村の平島では、ネイシとヘソババは別人であるが、出産の祝にはネイシも必ず参与している。産神に対する考え方の変遷は、氏神の祭祀者と別に、産神の司祭者が必要とし、呪力をもつ産婆を生じたのではなからうか。更に進んでこの産婆は、産穢に立ち会う者として、一方の氏神、産土神の神聖さを強調するに反して賤業視されていたのではないかと思う。

しかしこの問題は、氏神と産土神がどのような関係にあるのかを考察した上でないと、確としたことはいえない。両者は全く別なものであるのか、あるいは同じ神であるかということが問題である。更に産の忌は、穢れとされているけれども、これは忌の觀念、又は内容における分化の結果であるかもしれない。こういうことを併せて問題としてみなければならぬ。本論における私の考察も、この重要な問題を追求した後、再考しなければならないものと思う。

註(1) 「御産所日記」群書類従卷第四百廿

(2) 森山泰太郎著「津軽の民俗」二二頁陸奥新報社

昭和四〇、十一

(3) 名取壘之助著「桂女資料」大岡山書店、昭和十三、七

(4) 喜田貞吉「散所法師考」民族と歴史四卷三号

(5) 柳田国男「山荘太夫考」郷土研究三卷二号